

職業適応と職業観との関連についての一方向

西 村 耕

本稿は、職業適応を研究するに、職業観及び職業倫理との関連でとらえる方向があることを指摘し、それを職業研究の中に位置づけようとする試みである。

職業についての研究は、在来、存在の学としての心理学的立場及び社会学的立場からとりあげられてきた。しかしながら、職業は、全人格、全人生と深いかかわりをもつものであるから、価値観との関連を看過することはできない。

本稿のねらいの一つは、個人の個性・能力に関する問題を材料とし、適応の概念を媒介として、従来の研究の間隙をうめる分野を開こうとする試みである。

その一方法として、宗教のもつ職業倫理を、個性観・能力観を鍵として、分析しようとするものである。

本稿は、以上の問題意識を、流れにそってできるだけ簡明に表わそうとした研究ノートである。したがって、いちいち引用して論ずることはしていない。左欄に書き出した項目は、今後詳論する時の見出しともなる性質のものである。

適応の概念

適応の概念は、本来生物学で発達したものであるが、今日では、心理学、教育学などにおいても、中心的な説明原理として用いられている。適応について、さまざまな定義が下されてい

るが、「個人の諸条件と、環境の諸条件とが、調和的關係にある状態、又はそれに至る過程」とする点において一致している。

職業適応も、基本的にはこの考えにそうものであるが、職業適応の場合、主体側のどの部分を主眼とするかによって、いくつかの流れに分類することができる。

職業適応の定義

論者は、職業適応の概念を「職業生活を送るにあたり、個人の諸条件と環境の諸条件とが、調和的關係にある状態、又はそれに至る過程」と定義する。

その上で、職業適応を、身体的適応、心理的適応、精神的適応の三つの角度からとらえようとするものである。

身体的適応

身体的適応は、組織の生理的恒常性を保つための反応であり、且つ、外部環境の変化に対する組織の合目的的变化である。生命を安全に保つための合理的反応であるから、以下の諸適応の基盤となるものである。

心理的適応

心理的適応は、欲求にかかわるもので、消極的には心理的緊張の解消、積極的には、行動するためのエネルギーを生み出すものである。

精神的適応

精神的適応は、個人のもつ価値観を基礎として、職業についての、心的構えを形成し、又上記の心的エネルギーに方向を与えるものである。元来、職業適応研究の中核をなすものは、心理的研究であった。身体的適応についての研究も多くはなく、とりわけ、精神的なものを、職業適応のカテゴリーでとらえた研究は数少ない。

しかしながら、職業生活に積極的意義を認め、いきいきした充実感をもつことなどは、職業適応の概念に包摂されうるものである。これら価値観、生きがい等の精神生活とかかわり深い

職業適応と職業観との関連についての一方向
ものを精神的適応とするものである。

論者は、精神的適応の具体的内容を、職業観と職業倫理に求めるものである。

職業観

I 職業観

- a 職業認識—職業は何であるとする認識のしかた。
- b 職業意義—職業の意義と目的
- c 職業価値観—職業を通して得られるもの、或は実現できるもののうち、どれをどの程度、重視するか。

職業倫理

II 職業倫理

- a 職業に対する規範意識
 - イ. 社会的規範 他律的規範
 - ロ. 内面的規範 自発的規範
- b 職業に対する心的態度

倫理が、内面化し、血となり肉となって、現実の内側から一定の方向に行動させようとする起動力となっている場合。

職業倫理のことばには、ある職業に特有の倫理を指す場合と、職業一般に要求される共通の倫理を指す場合がある。前者は、その職業を遂行するための行動基準としての性格が強い。後者は、むしろ労働倫理というべきで、より根底的な生活態度、勤労を支えている心構え、つらぬかれている精神の問題であろう。

分限の倫理

専門の倫理

勤労の倫理に関する区別の一つは「分限の倫理」と「専門の倫理」である。等しく、職業への専念と自己滅却を強調するものであるが、

分限の倫理—封建社会において支配的であった縦関係の倫理であり、その命題は「身のほどを知れ」である。

専門の倫理—近代社会においてはじめて支配的となった横関係の倫理で、その命題は「わき見をするな」である。

有機的職業倫理

いま一つの二分法にしたがえば、それは、「有機的職業倫理」と、「禁欲的職業倫理」である。

有機的職業倫理—職業を生物有機体の諸器害になぞらえて、各人が与えられた部分を、誠実に果すことによって、全体社会の安寧は保たれるとする集団主義的倫理。

禁欲的職業倫理

禁欲的職業倫理—日々の職業・勤務への休みなき献身。勤務に全精力を集中させるための克己、その行為自体と、その成果とに意味をみつけていく倫理。

「分限の倫理」と「有機的職業倫理」。「専門の倫理」と「禁欲的倫理」とを、互に近接するものとして纏めることができる。いずれにせよ。両者とも、職業・勤務を本質的に肯定することを前提として成り立っているものであることに注目しなければならない。

職業倫理の問題点

現在、官僚化と機械化が急速に進行するなかでは、勤務は、局限された範囲の、断片的な作業にならざるを得ない。本来多面的な人間性が、益々徹底する個別化・専門化の中におかれるとき、もはや、無条件に労働を肯定することを前提とした倫理が、そのまま通用するであろうか。「勤務のための予暇」か、「予暇のための勤務か」のテーマが、かつてのような単純なものとしてではなく、ある重みをもって提出されていることにも、目をむけなければなるまい。職業の倫理を、全人生、全人

職業適応と職業観との関連についての一方向

間性の視野よりとらえなおさなければならない所以である。

以上のような精神的適応の基底は、統一され、且つ方向性をもつた価値観である。統一された価値観は、多くの要素よりなるものである。なかでも、自己の個性・能力をいかに受けとめるか、それにどのような意義を認めるか、すなわち、自己の性能についての実存的理解は、具体的な職業と、直接出合うものである。それ故、個人の性能についての実存的理解（性能観）と、職業倫理との関係を明らかにしようとするのが、本論の目的である。

個性・能力観

ここでいう性能とは、性質と能力であるが、性質は、気質、性格等の言葉で表現される。情意に関する傾向のうち、比較的固定的なものを指す。能力は、素質的ないわゆる学習可能性と、後天的に獲得した諸能力の総称である。

従来、性能については、発見（適性テスト）形成（訓練）、発揮（適材適所）の角度、すなわち、心理的適応の立場から研究されてきたが、本論は新たに、精神的適応の立場から性能をとりあげようとするものである。

職業倫理を問うに、個人のもつ特徴を中心とする場合と、一時代、一地域、一集団の特徴を中心とする場合がある。本論は、両者を包含するものであるが、上述したように、職業と労働の問題を、全人生的視点でとらえる意味において、宗教のもつ職業倫理と性能観との関係にしばって考究するものである。なかでも、「信仰と職業」について、鋭く緊張を意識し、絶えず問いを發し続けてきたキリスト教の場合を、先ずとりあげるものである。

職業倫理とキリスト教との関連について考察するには、次にあげる三つの角度が考えられる。

1. 職業倫理の形成に、キリスト教が、如何に影響を及ぼしているかを、客観的、因果的にとらえようとする社会科学的研究。
2. 職業倫理についての、キリスト教教義、あるいは、キリスト教信仰からの主張の研究。これは、一般的、普遍的キリスト教職業倫理を追求する場合と、キリスト教界に広汎な影響を与えた代表的人物の説（逆にいえば、彼の説は、その時代と社会をうつしたものである）を観みる場合。
3. 数々の重圧と軋轢の中に働く労働者が、日々の労働において、現実に出会う具体的な選択と、決断に、キリスト教は如何に答え、指針を与えうるかの実際の問題である。

以上、3つの角度から考察し得るが、本論は、キリスト教の場合における、職業倫理と性能観との関係を明らかにしようとするものであるから、2の場合、すなわち、キリスト教教義・キリスト教信仰からの職業観・労働観・職業倫理・労働倫理と、性能についての考え方との関連を検討するものである。

しかしながら、本論は、神学的研究を志すものではなく、まして、信仰についての所信をのべるものでもない。あくまで、職業倫理（密接な関連をもつものとして、当然職業観労働観、労働倫理を含む）を、キリスト教の場合をかりて考察するものである。

具体的には、キリスト教社会倫理における一般的職業倫理、職業観を整理しながら、特定人物個人の職業倫理と性能観との関連を探るものである。

その人物としては、現代の生んだ最も偉大な神学者の一人で

職業適応と職業観との関連についての一方向

あるカール・バルトと、神学者たることを自ら否定し、信仰の人たらしとした日本のキリスト者、内村鑑三の場合は興味深い。

もとより、バルト神学の神髄を知るには、彼の歴大な『教会教義学』を修めた上で、専門的研究を必要とするであろう。しかし、ここでは問題の範囲を限定し、さしあたっては、その領域についてのべられている「教会教義学Ⅲの4」によることにより、大要を知ることができるのではないかと思はれる。

キリスト教の職業観 キリスト教によれば、人間は、神と隣人との関係に生きるものと理解される。それ故、職業・労働は、次のように意味づけられる。

労働は、神に対する奉仕の場である。

労働は、神の召しに対する応答の場である。

労働は、神の創造の計画に参与する場である。

職業を通して、神の栄光を表わすべきである。

職場は、証の場である。

労働は、賜物を生かす場である。

労働は、隣人に出会い、隣人に益を与える機会である。

聖書の個性・能力観 ところが、新約聖書には、職業の意義について、直接書かれている個所はない。しかるに、キリスト教の立場から、職業について論じられているのは、聖書のいろいろの個所の解釈から、導き出されるからであろう。その個所の一つが、人間の個性・能力についてのものである。

そこで、内村鑑三については、彼が、性能について書かれている聖書の個所を、いかに解釈しているかを知り、そのことと、彼の職業についての考えが、いかに関連づけられるかを考察していきたい。

このような角度からの、職業適応研究を試みるものである。